
三日月ワタル

北未知 はねま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三日月ワタル

【Nコード】

N5912A

【作者名】

北未知 はねま

【あらすじ】

三日月ワタルという謎めいた少年とナナカの、周囲で起こる恐ろしい出来事と、悲しい恋物語。

（前書き）

今回は初めてのホラーです。がんばって書いてきました。少し長めですが、読んでいただければ幸いです。物足りなかったら、ごめんなさい！

雲ひとつない、きれいな夜空だった。小さな星が点々と灯り、細い三日月が鋭く輝く真下を、一台の黒いセダンが滑らかに走っている。車内には、幼い男の子とその父親らしい男が乗っていた。

「お父さん、あとどれくらいで着くの？」

男の子は、父親の後ろ姿に向かって尋ねた。幼稚園の制服を着たまま車に乗っているのは、今日から新しい家に住むからで、お別れ会でもらった寄せ書きの色紙をひざの上に載せている。

父親は、ラジオのボリュームを下げながら、

「向こうに見える明るい所に、ワタルの新しい家があるんだ。もうちょっとかかるから、それまで眠っていたらどうだ？ 着いたら起こしてあげるよ。」

男の子は、うんと言って両眼をつむった。が、すぐに薄目を開けて窓の外を見る。車を追うように、三日月が並んで走っていた。

（ちゃんについてこいよ）

かすかに微笑んだ目が、三日月のように細くなる。

男の子の母親は二年前に行方不明になり、今では父方の妹が時々身の回りの世話をしている。

新居に移る今日も娘を連れて、一足先に運ばれた荷物を整理していた。

「ねえママ、ワタル君、またこんなもの持ってるよ」

娘が開けた段ボールの中をちらっと見ると、頭だけのぬいぐるみや人形が、ぎっしり詰め込まれている。

「ママ、そこはもういいから、こっちの荷物を分けてちょうだい」
マリコはすぐに箱のふたを閉じた。

マリコにとって、ワタルはかわいい甥っ子だった。演劇で、天使の役がぴったりなほど愛らしい顔立ちに、どこか大人びた表情が魅

力的だと思った。

だが、母親が失踪してから、何かが変わった。それが何なのか、マリコには説明できないが。

外で車が止まる音に続き、ドアの開閉音も聞こえてきたので、ナナ力はそつとカーテンの隙間からのぞいた。

隣にできた新しい家の前に、親子らしい人影が動いている。家の中には、もう誰かがいるらしく、明かりが灯っていた。

幼稚園から帰ってきた時、家の前に小さなトラックが止まっていたのを、ナナ力はふと思い出す。

（同じ年の子ならいいのにな）

明日は日曜で幼稚園が休みなので、家の前で出てくるのを待ってみよう。早く明日になあれ、と小さくつぶやきながら、ナナ力は布団にもぐり込んだ。

「あら、結構時間がかかったのね。渋滞していたの？」

玄関のドアを開けながら、マリコは兄のケンイチに言った。予定では、午後の七時には到着しているはずだった。

ケンイチは、肩をポンポンと叩きながら、

「いや、空いてはいたんだが、途中でタイヤがパンクしたから、交換するのに手間取ってしまった」
と言って、ワタルを見やった。

ワタルは、こくんとうなずくが、ママが人形を持って立っているのを見るなり、思いきり突き飛ばした。

「痛いよー!!」

床に倒れたまま、ママは激しく泣いた。

「バカ野郎！何てことするんだ！ワタル、ママちゃんに謝れ!!」

ケンイチはワタルの頬を激しく打ち、泣きじゃくるママの前にひざまずかせた。ワタルの口から血がにじみ出す。無表情だが、目は獣のように凄みがあった。

「マミが僕の人形を壊したんだ」

床に転がった人形は、どこにも壊れた形跡がない。

「・・・だって、お人形さんがかわいそうなんだもん」

マリコはすぐに、マミがバラバラになった人形を直したことに気付く。

「ごめんね、ワタル君。これはあなたの人形なんだもんね、マミ、勝手に触っちゃだめでしょ。でも、女の子に乱暴なことするのは良くないんじゃないかな」

すると、ワタルの目が穏やかになり、

「ごめんね、マミ」

と、小さな声で謝った。

マミは黙ってうなずいたが、家を出る翌日まで、口を利かなかった。

ナナカは朝食を食べ終わると、さっそく隣の家を観察しに家を出た。家の前の道に、チョークで絵を描きながら待った。

やがて、家から男と男の子が出てきた。男はナナカの父親よりも体が大きく、優しいような感じに見えた。両手に幾つか紙袋をさげている。その脇に、ナナカと同じ年くらいの男の子がいたので、思わず見つめていると、向こうも気付いてナナカを見た。

（わあ、あの子、かっこいい顔だな。テレビに出ている子かな？）

「あ、君、ここの家の子供？お父さんかお母さんいるかな？」

ケンイチはにつこり笑って、ナナカに近づいた。引っ越しの挨拶をするために、手土産を持って回るところだった。

「うん、呼んでくる・・・お父さん！」

すぐにドアが開き、小柄な夫婦が現れた。

「初めまして、隣に引っ越してきました、三日月と申します。これからよろしくお願いします。家族は私と、息子のワタルの二人です」

ケンイチはそう言って、ワタルの肩をポンと叩いた。

「三日月ワタルです。よろしく願いします・・・これどうぞ」

ケンイチが持っている紙袋の一つを、小さな手で夫婦に差し出した。女がそれを受け取った。

「まあ、ありがとうワタル君。初めまして、山野です、こちらこそよろしくね。ワタル君は年いくつ？」

「五歳です」

ワタルとナナカは同じ年だった。

やがて、子供同士はもちろんのこと、家族ぐるみでつきあうことが多くなっていた。ケンイチは温厚で社交的な男だった。ケンイチの妻が行方不明と知るや、山野夫婦は深く同情し、ワタルの面倒をよく見てくれるようになった。

春も終わりに近づき、少し汗ばむ陽気のなか、ナナカとワタルは近所の公園へ遊びに行った。しばらくブランコや滑り台で楽しんでいたが、突然ワタルが帰ると言い出した。

「どうして？」

「秘密」

ワタルはそう言って公園を走り去った。

ナナカはまだ帰りたくなかったので、ワタルのあとを追った。ワタルは家には帰らず、住宅街を通って古いマンションの敷地に入っていく。そして、駐車場に停めてある車の後ろに身を隠し、何かを待っているのか、動かなくなった。

ナナカは駐車場が見える植え込みに隠れ、ワタルを見守った。

ワタルが何を考えているのか分からない時が度々あった。そんな時は、目が人形のように表情をなくし、ナナカがどんなに話し掛けても、反応がないのだ。今、目の前にいるのが、その状態だった。しばらくすると、マンションの入口から男の子が出てきた。

（どこかで見た顔だな）

ナナカが思い出そうとしていると、ワタルが車の陰から飛び出し

た。それからさっきの男の子に駆け寄り、何かを頭に振り下ろした。
「うつ！ぐう・・・！！」

地面に倒れた男の子に馬乗りになり、同じことを繰り返す。ワタルの手と男の子の頭が、次第に赤くなっていく。

「何をしてるんだお前！！」

駐車場にきた男が、慌ててワタルを引き離れた。ワタルの手から赤い石が落ちる。顔は無表情だが、目が狂ったようにあちこち見ている。

倒れた男の子が力なくナナカの方を向く。

その顔は・・・ナナカの中で消えていた記憶が蘇る・・・ランドセルを投げてきた奴・・・髪をつかまれ、きたないハンカチを口に入れられた・・・誰もいない公園の茂み・・・おもしろそうにナナカの体を見る・・・ワタルが大声で叫びながら現れた・・・そいつはワタルをさんざん殴って逃げた・・・。

「やあああああ・・・！！！」

ナナカはその場に倒れた。

「ナナカ、ちょっと買い物に行ってくれない？ここにリストを書いたから」

ナナカの母チエミはそう言って、小さなメモを娘に渡した。夕食の材料に買い忘れがあったからだ。

「うん、ちょうど気晴らしをしようと思っていたところ。行って来ます」

週明けに中間テストがあるので、がんばって勉強していたが、そろそろ机に向かっているのに飽きてきたのだ。

外に出ると、どうしても隣の家を見てしまう。が、誰も出てくる気配がないと分かると、少しホッとした。

ナナカは今年で十六才、高校生になった。三日月ワタルとは別々

の高校に進学したが、家は相変わらず隣同士で、何度か姿を見る時があった。あの出来事以来、ナナカの両親はワタルを避けるようになった。ナナカの身に起こった出来事については、一切触れることがなかった。というのも、ワタルがどんなに問いつめられても、終始黙っていたからだ。ワタルの父ケンイチは、毎日のように被害者の見舞いと謝罪のために病院と自宅を訪ねた。しかし被害者の少年は、脳に大きな傷を残したまま、八年前に亡くなった。

夕方のスーパーは想像以上に混んでいた。人とカートを避けつつ、ナナカはリストの商品をささとカゴに入れ、レジ待ちの行列に並んだ。

順番を待ちながら、何気なく表の通りを見ると、制服姿のワタルがゆっくりと通っていく。どんなに遠くにいても、たとえ人混みに紛れていても、ナナカはワタルを見つけることができた。理由は、ワタルの端麗な容姿にある。高校生になったワタルは、幼稚園児だったかわいさに変わり、思わず見とれてしまうほど魅力的な少年になっていた。

それでも、ワタルの周りに人がいないのは、彼が持つ独特の雰囲気のためで、ほとんど一人で行動していた。

レジで会計を済ませ、いつもよりもゆっくりと商品を袋に入れながら、ワタルの姿を目で追った。

スーパーを出てからも、ワタルに追いつかないように、なるべくのんびりと歩いた。

（私何やってるんだろう・・・でも、あれから一度もしゃべってないし・・・）

やがて公園の前に来た時、ベンチに座っているワタルの姿が目に入ってきた。周りはすっかり薄暗くなり、くすんだ外灯が彼を背後から照らしている。

公園の嫌な記憶を振り払うべく、ナナカが通り過ぎようとしていくと、公園に入っていく女の姿があった。女は、迷うことなくベン

チに並んで腰掛け、ワタルの肩にしなだれた。

（誰だろう。ワタル君に彼女がいたなんて、知らなかった）

これ以上見ていてもしょうがないと、ナナカはそつとその場を離れた。

「ねえ、三日月君、話ってなあに？」

ユエミはそう言いながら、ワタルの腕にもたれた。ワタルとは同じクラスになってから親しくなった。告白されたわけでもないのに、彼女とはいえないかもしれないが、一応デートらしいデートをしているつもりだった。ただ、（好き）とか（かわいい）とか言われたことがないし、にっこり笑っているワタルを、ユエミはまだ見たことがなかった。

それでも、嫌いな人ときあう人なんて、いるわけがないと思っているので、単に照れくさいだけなんだと納得する、プラス思考なユエミなのだった。

「もう二人きりで会うのはやめよう」

ワタルはそれだけ言うのと、突然立ち上がった。

「何それ、どういうこと？新しい彼女でもできたの？」

確かにもてるタイプだとは思うが、ユエミは自分に多少は自信があっただけに、納得が出来なかった。

「僕には元々彼女なんていない。誤解をさせていたのなら、悪かったよ」

ユエミが手を差し出すが、それよりも早くワタルは離れて行った。

「何よ、私だって彼氏と思ったことなんてないわよー！」

とは言ったものの、自分の言った矛盾さに気づいて頭がかつと熱くなった。

夕食を食べ終え、ナナカは勉強を再開した。が、さっきの女が気になってなかなかかはかどらない。知らない女だが、ワタルと同じ高校だろうと思った。両親がワタルを避けているのは、本当の理由を

知らないからだ、だからといって話してしまうと、ナナカ自身が
平静でいられなくなるのが怖かった。

（もし、あんなことが起きなかったら、今も友達でいたかもしれない）

しんと静まりかえった夜の公園。ここを一步出れば、車がたまに
通るだけで、道路を挟んだコンビニや弁当屋が並ぶ通りの前には、
低木の並木が目隠しのように植えられている。

ユエミはまだベンチに座っていた。自分のプライドを傷つけずに、
友達に失恋したことを話す方法を考えていたからだ。

背後の外灯が消えたような錯覚を覚え、思わず振り返ったが、実
は錯覚ではなく、ユエミは頭から何かを被せられた。

「誰か、助けてー！！」

ユエミは必死に叫んだが、声がぐぐもって息苦しくなっただけだ
った。おまけに首に何かを巻き付けられて、もう声が出ない。

ドスン！

ユエミはベンチから転げ落ちた。

ズルズル・ズルズル・。

頭をつかまれたまま、どこかに引きずっていかれる。

（ああ、お願い、助けて・・・）

・・・しかし、心の叫びが届くことはなかった。

平日の昼間、公園はたくさんの野次馬とそれらを威圧する警察官
であふれていた。

早朝に散歩をしていた老夫婦が、公園の砂場にある異様な物に気
付き、すぐに警察に連絡した。

砂場の中央に、大きな山があつて、そのてっぺんに赤い袋が載っ
ていた。しかしよく調べてみると、山の中に人が膝を抱えた格好で

埋まっていたので、袋の色は、その頭から染み出した血であることが分かった。

袋を開けるのが難しいくらい、皮膚はボロボロになっていた。監察医によると、数え切れないほど蹴られたり踏まれたりしない限り、ここまでひどくはならない、ということだった。

公園は封鎖され、近隣を刑事が聞き込みに回った。当然、ナナカの家にも刑事が来た。被害者の写真を見せられたが、知らない顔だったので、ナナカは無反応だった。刑事はその様子を見るなり、早々と出ていった。

しかし、ナナカの中でわずかな不安が残った。

（あの時、ワタル君は彼女らしい子と会っていたけど、顔までは見なかった）

もし、写真の女性がワタル君の彼女だったら・・・ナナカは自分の考えをすぐに否定した。だが、刑事の話によると、被害者はワタルと高校も年も一緒である。

ナナカは、赤い石を何度も打ちおろす幼いワタルが、頭の中で鮮明に再生されるのを、止められないでいた。

暗闇に浮かぶ女のかげろっ・・・。

頭の角度が異様で、両手を前に突き出している。

「く、来るな！」

ワタルは持っていた石を振り上げる・・・が、そこには誰もいない。

人形がたくさん山積みしてある。みんなワタルを見ている。

「わあああああー！」

ワタルは人形の首を引きちぎる、ねじる、かじり取る。

あっという間に二つの山ができる。

頭だけの山と、頭のない体の山。

「うっ・・・！」

ワタルは汗で濡れた髪を乱暴にかきむしる。また同じ夢を見た。窓を開けて夜の空気を吸い込む。半分に欠けた月が、どんより浮かんでいた。

警察は、被害者と親しかった、三日月ワタルという少年に事情聴取を行った。しかし、被害者が亡くなった時刻に、本屋で立ち読みをしている姿が何人もの人に目撃されている。そのほとんどが女性だったことは、いうまでもない。

「・・・運のいい奴だ」

外見に自信のない刑事は、思わずつぶやいた。

ナナカがワタルの姿を見たのは、公園の出来事が世間に語られなくなった頃だった。

クラブ活動で遅くなり、帰路を急いでいると、前方にワタルの後姿があった。その隣に、見たことのない女の子がいて、何やらしゃべっている。

（もう新しい彼女ができたんだ。前の彼女がかわいそう）

ナナカはムツとしたまま、早足で前の二人を追い抜いた。

「ナナカ、あんまり遅くなったら危ないぞ」

ワタルが、ナナカの背中に向かって言った。

ナナカは思わず立ち止まりそうになったが、何も言わずに歩き続けた。

「ワタル、今の子だあれ？ちょっと親しげじゃない？」

リミは少しふくれっつらで言う。ワタルとはクラスが違うが、入学した時から目をつけていた。

「隣に住んでる幼なじみ」

ワタルは無表情で答える。今日はどうしても家に遊びに行きたいというので、仕方なく父ケンイチの許可をもらい、夕食と一緒に食べることになった。

「お邪魔しまゝす！」

二人が居間に入ると、すでに夕食の用意がされていた。

「いらつしゃい、リミさん」

ケンイチが鍋つかみをつけたまま、満面の笑みで現れた。つられてリミも、笑顔になっていた。

「・・・またか」

刑事は難しい顔で、階段に転がる死体をのぞきこむ。駅の小さな出入り口の階段に、一人の女が倒れているのを、駅員が見つけて通報したのだ。例の公園からさほど遠くない駅でのことなので、刑事はすぐに過去の事件を思い浮かべたのだった。

被害者は制服と持ち物から、前の被害者と同じ高校生だと判明した。顔にはやはり袋がかぶせられ、階段で何度も叩きつけられたらしく、階段には大量の血が流れていた。

三日月ワタルの名前が挙がったが、今回もたくさんの証言者がいたため、前回同様、行き詰まってしまった。

暗闇に浮かぶ女の姿・・・。

顔はほとんど骸骨に近い。

「お前が悪いんだ！」

女の手を避けながら、夢中で逃げ回る。

女の体がバラバラになり、周りを取り囲もうとする。

「よせ！来るな！！」

女の悲しそうな嗚咽が響き渡る・・・どこまでも。

ナナカはなぜか元気がなかった。少し熱があるようなので、母チエミが学校を休ませた。

「どうしたの、ナナカ。何か悩んでいることでもあるの？」

チエミはそう言っではみたものの、何となく気付いていた。最近

ナナカは、窓から隣の家を見ていることが多い。

（きっとワタル君のことが心配なのね）

ワタルが五才の時に起こした出来事を、チエミは今も忘れることができない。しかし、あんなに仲が良かった二人を引き離したことは、多少後悔している。

最近起こった恐ろしい事件が、ワタルと無関係であるようにと、祈らずにはいられなかった。

「何でもない」

ナナカは頭から布団を被った。

「コーヒーでも飲む？」

ケンイチは一週間程、出張で家を空けているため、従妹のマミが夕食を作りに来ていた。小さい頃は、ワタルに怖い印象しか持っていなかったが、今では会うのが楽しみになっていた。

今日の深夜に、ケンイチが帰ってくるので、二人きりでいられるのもあと少しだった。

「うん」

ワタルが押し入れに顔を突っ込んだまま、動こうとしないので、マミも後ろからのぞいてみる。

ワタルの手に、大きなナイフがあった。箱の中には首だけのハトの死骸が、ぎっしり詰め込まれている。

「な・・・何やってんの？こ、これ、ワタルがやったの？」

ワタルはあの時から何も変わっていなかったのだ、とショックのあまり、マミは意識を失ってしまった。

「クッククク、マミは大げさだなあ」

ワタルは箱をさらに奥に隠してから、マミをソファアに寝かせた。その拍子に、ソファアの溝から、一冊のノートが出てきた。中を見ると、ケンイチの日記だった。

「・・・」

ワタルは、ノートを破ろうとしたが、何とか思いとどまった。

そして、マミを置いて家を飛び出した。

（あれ？怖い顔してどこへ行くんだろ？）

ナナカがぼうつと外を見ていると、突然ワタルが家から出てきたので、とっさにカーテンに隠れた。しかし、妙な胸騒ぎを覚えたため、急いで跡を追うことにした。

（こんな所に何の用があるの？）

ナナカは息を切らせ、ぐんぐん走るワタルの姿を追った。二人は明るい通りから、やがて工場が密集している寂しい場所に入った。工場から小さな明かりと蒸気が所々にもれているが、人の気配は感じられない。

今まで走っていたワタルが急に立ち止まり、（関係者以外立ち入り禁止）と書かれた金網のフェンスに、軽々とよじ登って中に入った。

ワタルがいなくなってから、ナナカも苦勞してフェンス内の敷地に入る。歩いていった方へゆつくりと進んでいくと、ザクツザクツと、土を掘っている音がしたので、そっと隠れてのぞいた。

元々柔らかかったのか、かなりの深さまで掘っていた。ガン、という音と共に、赤いドラム缶が姿を見せた。ワタルが蓋代わりの段ボールを取った。すると……。

（わっ、何この臭い！）

ナナカが鼻をつまんでいると、ワタルが何かをつかんで持ち上げた……それは、変色した腕だった。よく見ると、目を開けたままの頭も、足も、胴の一部も、のぞいている。まるでおもちゃ箱のよう、収まっていた。

「うそ……いやあああああ……！！」

ナナカは無我夢中でフェンスを上り、息の続く限り走った。

「あれ、私、どうしたのかしら？」

マミはソファアの上で上体を起こした。ワタルを探したが、どこかへ行ってしまったらしかった。

「そうか、ワタルが押し入れに・・・ううん、忘れちゃおう」

マミが足下に落ちているノートを拾っていると、玄関のドアを開ける音がして、ケンイチの声がした。

「あ、もう帰ってきたんだ」

ケンイチは鞆を持ったまま居間に入る。

「おじさん、お帰りなさい」

「あれ、マミちゃん一人？ワタルは・・・」

ナナカはやつと家の前で止まると、ゼイゼイと息を整えた。

（信じられない・・・ワタル君が・・・）

ワタルの家の窓から明かりがもれている。その一つに、動く人影があった。

（ワタル君のお父さんに言った方がいいかな・・・）

ちよつと迷ったものの、意を決してワタルの家の前に立った。
ピンポン。

誰も出てこないのもう一度鳴らしたが、やっぱり反応はない。
恐る恐るドアのノブを回すと、あっさりと開いてしまった。

「こんにちは・・・隣の山野です」

玄関に男女のクツがあった。居間の明かりが廊下にのびている。誰も答えてくれない。ここまで来てしまったし、あんな恐ろしいことを黙っているわけにはいかなかった。父親なら何とか出頭させられるんじゃないかと思い、ナナカはクツを脱いで廊下を歩いた。

居間には誰もいないらしく、大きな鞆だけが置かれている。だが、奥の浴室からシャワーの音が聞こえてきた。

（ちよつとまずい場面かも・・・）

ナナカはすぐに居間を出ようとしたが、床に散らばったノートの残骸が気になり、一部を拾った。

それは、日記らしく、ケンイチが妻のことについて、書いていた

ようだ。

・・・マドカ笑顔は最高だ。いつも隣で笑っていてほしい。今日、マドカのおなかに、新しい命が宿っていることが分かった。マドカにそっくりのかわいい赤ちゃんだといいな。僕は何て幸せ者なんだろう！・・・

（ワタルのお母さん、マドカさんっていうんだ）
思わずまた、床のノートを拾い上げる。

・・・あいつは絶対に浮気をしている。相手が誰か、突き止めないと！・・・

・・・驚いた。相手が自分の弟だったとは！！あいつら、絶対に許せない！！・・・

・・・あいつらに罰を与えた。当然だ。あいつは最後まで弟をかばっていた。同時に殺すのは気に入らないから、マドカは閉じこめておく。あいつらの子供が高校生にでもなったら、裁いてやろう。子供は・・・殺人鬼にでも仕立ててやるか。・・・

「見たんだな、ナナカちゃん」

ナナカが声を出す間もなく、ケンイチの大きな手が、ナナカの鼻と口を覆った。相手の恐ろしい形相と力に、抵抗することができなくなっていた。

ナナカの鼻が、鉄のような臭いを吸い込み、むせかえりそうになる。

「洗っても洗っても取れないんだよ。血の臭いは嫌いかい？」

ケンイチの手に力が入る。息ができないし、胸を押さえられているので、ナナカの意識はもうろうとなっていく。

「ゲボゲボ・・・!!」

ケンイチの喉が裂け、大量の血が流れている。ナナカは悲鳴をあげながら、ケンイチから離れた。

そばに、ワタルが立っている。手に、大きなナイフを持っていた。刃先から、赤い液体が床に落ちる。

「ワタル君・・・」

ナナカは、そつと声を掛けるが、ワタルの耳には入らない。ワタルはケンイチに近付くと、ナイフを何度も突き立てた。

その時ケンイチは、なぜかうれしそうに、

「マドカ、マドカ・・・」

と言っていた・・・が、もうこれ以上言えそうになかった。

ナナカは同じ悪夢をみているような気がして、その場に倒れた。

「ナナカ、大丈夫か？」

ナナカは軽いめまいを感じながら、周囲を見回した。自分が座っているのは、公園のベンチだった。目の前に、ワタルが心配そうにナナカの顔をのぞき込んでいる。いつもの澄んだ目だった。

「ワタル君・・・」

ワタルは、そつとナナカの口をふさぐ。

「いいか、さっきのできごとは、一切忘れるんだ。お前は、何も見ていない。今から、家に帰るだけだ、分かったか？」

ワタルの顔を見ていると、誰もあんなことをするように思えないだろう。ナナカはふと、ワタルのことが心配になった。

「ねえ、これからどうするの？私、ワタル君は悪くないって、ちゃんと警察に説明するよ」

するとワタルは、ふつと息をもらした。

「ありがとう、でも、大丈夫、一人で説明できるから。そんなことより、怖い思いをさせて、ごめん」

ワタルはそう言っで、立ち去ろうとした。

「待って！私、ワタル君のこと、初めて会った時から好きだったの。ずっとそばにいて欲しい……」

ナナカの顔は真っ赤に染まっている。ワタルは、驚いた様子で立ち止まる。

「何言っでんだ、僕の家族はおかしな人間ばかりだし、僕自身も何をするか分からない。今のは聞かなかったことにするよ」

ナナカは、夢中でワタルにしがみついた。ワタルと離れたくなかった。

「……嫌」

「もしかすると、僕はナナカを殺してしまうかもしれない。それでいいのか？」

ナナカは、こくんとうなずいた。

「ワタルになら、殺されてもいい」

ワタルは、黙ってナナカを強く抱きしめた。

（お願いだ、僕を空から見張っててくれ。だいじな人を傷つけないように……）

三日月が、二人を優しく照らしていた。

……おわり

（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます!!どうか、感想もお聞かせ下さい!またがんばります!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5912a/>

三日月ワタル

2010年10月8日15時18分発行